

いがとこわか通信 vol.3

～三重とこわか国体をもっと知ろう～



Q. これまでの国体に参加された印象を教えてください。

(脇屋) 他の国内の大会と比べて出場選手数が多いですね。クレー射撃はトラップとスキートという2種目があるのですが、全国から200人を超える選手が出場します。また、大会期間も通常の大会は2日間で終わり

平成29年度全日本選手権大会スキートの部で優勝し、「三重とこわか国体」伊賀市開催競技のクレー射撃(成年)に出場が期待されている、上野ガス株式会社所属の脇屋昂選手に話を聞きました。



ますが、国体は5日間行われ、観客も地元の人だったり、選手の家家族だったり、他の大会にはないぐらいたくさんの方が応援に来てくれます。楽しさもありますし、緊張感もすごいです。正直、身近な人が応援に来てくれるので、海外の大会よりも緊張します。

Q. とこわか国体への思いを教えてください。

(脇屋) 私はサポートを受けて三重県に来ているので、結果を出して恩返ししたいと思っています。目標は個人優勝、団体と総合で入賞ですね。

Q. 市民の皆さんへメッセージをお願いします。

(脇屋) ぜひ会場に来ていただき、クレー射撃のリアルな音や、クレーの割れる爽快さを感じてもらえたらと思います。

伊賀の歴史余話

6

戦地から故郷へ

～兵士となった俳人の思い～

昭和18(1943)年12月、日本では神宮外苑での出陣学徒壮行会を終えた学生たちが、軍への入隊の時間を迎えていました。

そうした学生の中に、伊賀出身の菊山有星がいました。俳人でもあった彼は、出征先のフィリピンから、両親へ俳句を送っています。

「ふるさとの祭や父母はいかにますか」
遠く戦地から故郷伊賀の祭囃子を懐かしみながら、両親を気遣う句が届けられた頃、フィリピンでは、日本軍が連合国軍を迎え撃つための防衛戦を始めようとしていました。

激しい戦闘によって、昭和20(1945)年4月、有星はルソン島に散ります。入隊前後に記された彼の手記は、戦没学生の遺稿集『きけわだつみのこえ』に収録されました。そこには、戦地に赴く恐怖と葛藤しながら、自らの生を問い続ける青年の姿が残されています。

それでもう一人、故郷へ俳句を送り続けた兵士がいます。のちに「伊賀俳壇」を主宰するなど活躍した居附稲声です。彼が任地であった徳山(山口県周南市)の海軍警備隊から、故郷の俳人宮城きよなみに宛てた多くの手紙が残されています。



▲居附稲声の宮城きよなみ宛葉書

手紙には、宮城から届く俳句雑誌『ホトトギス』を楽しみに、軍隊生活と句作に取り組む稲声の姿があります。時には、周囲の兵士に俳句の指導もしたようで「上官に教へるときなど感無量」とも記されています。

一方で、戦局は悪化の一途をたどっており「防空に設け焼夷攻撃に對し万全を期して下さい」など故郷を気遣う言葉も見られます。

「立哨の月にふるさとふと想ふ」
稲声の句からは、ふとした時に募る郷愁が読み取れます。

「平成」が終わりました。そして、間もなく新たな元号での終戦記念日を迎えるとする今、もう一度、戦地から届けられた十七文字に心を寄せ、平和を考える機会にしたいと思います。

*立哨 兵士などが、一定の場所に立って警戒・監視の任に当たること。

文化財課歴史資料係

☎ 52・4380 FAX 52・4381